

# 昔話の「竜宮」

——異郷観念の一面——

原岡敦子

はじめに

浦島太郎が、亀を助けて竜宮に招かれ、乙姫から玉手箱をもらって帰って来ると、わずかの間と思ったのが、実は数百年を経過しており、あけるなど戒められた玉手箱を開いたために、白髪の翁と化す、という物語は、幼い頃から親しんで来た。浦島太郎といえば、乙姫、玉手箱、それに竜宮をただちに連想するほどこれらの結び付きは強い。私が特に興味を抱くのは、「竜宮」である。この童話では、水の底の乙姫の御殿で、この世とは、時間の尺度が違っている神仙郷のようである。

しかし、同様に竜宮訪問のモチーフを持ちながら、種々の部分的相異をも示している昔話が、数多くあり、童話の浦島太郎は、その中の一つの型に属するものにすぎない。

そして、全国の昔話を見ていくと、竜宮は、その所在地の観念も機能も一様ではない。そこで、これら昔話の主要なモチーフを分析し、その中に語られている竜宮の観想や信仰を、明らかにしようと思う。竜宮訪問の昔話といっても、竜宮乃至は、観想上これに類する異郷を訪問する

モチーフを持つものを指しており、あくまでも、「竜宮訪問型昔話」であることをお断りしておく。

資料としてはおもに、「日本昔話集成」（関敬吾編昭和二十五年／三十三年）これに利用されている幾つかの採集文献、「日本昔話記録」（柳田国男編、昭和十七年）等を用いた。

## 一 「竜宮」と「浦島」

童話の浦島太郎は、竜宮に到達したが、各地の昔話、私の調べた約五十話のうちでは青森県、福井県、新潟県、香川県等のものが、浦島と竜宮との結び付きを持つだけで他には見当たらない。

右の四話中でも、玉手箱によって急激に老衰する、という筋のものは三つだけで、福井のものは、浦島太郎は、八百年後に帰郷しながら、もらって来た他の宝でさらに活躍することになる。玉手箱は、何の役も果たさない。青森県八戸附近では善助爺が、秋田県仙北郡では信心深い炭焼が、竜宮に招かれる。前者では、玉手箱による老と死を語るが、後者は、「山ほどの土産」をもらって帰ると二百年たっていて、体が溶けて骨ばかりになる、としている。

また宝海峽以南の島々では、「竜宮」の語は使われず、「ニラの島」「ネリヤ」、「ネインヤ」、「ネイーの島」がこれに相当するとして用いられ、もちろん浦島太郎も登場しない。しかし、モチーフや、筋の展開が、本土のものと同じと見られる説話もかなり採録されているので、右の点に留意しつつ扱いたい。

たとえば、沖永良部で、狩の得意な弟が、ニラの島へ行き、「年取ら

ぬ息をこめた箱」をもらって来るといい、主人公の性格が、神話の彦火火出見命(山幸彦)を想わせる。浦島太郎なる名は、御伽草子あたりに初めて現われると考えられ、いわゆる浦島伝説では、すべて、(浦の)島子となっている<sup>①</sup>。

浦島子の伝説の伝播、御伽草子や童話の流布などが、民間の昔話に密接な関係を持ち、さらにはこれらを変化せしめたことさえ、事実と認めざるを得ない。それにも拘らず、浦島ならざる主人公を有して、玉手箱ならざる贈り物をされて帰るとするものが、この型の昔話の中で圧倒的多数を占めていることに注目する必要がある。

一方「竜宮」については、どうであろうか。「竜宮」なる名称の異郷を語るものは非常に多いが、なお、この名を取らない異郷を語るものも皆無ではない。その上、同じ「竜宮」でも、その所在地の観念は決して一通りではない。今、ここで、竜宮やこれに類する異郷の、名称と所在地とを分類してみる。

#### A 「竜宮」の所在地

- ① 海底とするもの 最も多くの昔話が、海底に「竜宮」を観じている。
- ② 川や淵の底、又は、そこから通じているとするもの、秋田県仙北郡、新潟県南蒲原郡<sup>(一)</sup>、広島県安佐郡、鹿児島県下甕島など。特に広島のものでは、「薪を海に投げると竜宮の使いが、池から姿を現わす」としている。熊本県玉名郡(薪を淵に投げると、女が現われて竜神からの礼として、「鼻たれ小僧様」をくれる。厳密には、この型には属さない)

B 主人公の訪問する異郷が、「竜宮」と呼ばれないもの。多く

は所在の場所から説明的に呼ぶ。

- 「乙姫様の御殿」(新潟県南蒲原郡<sup>(二)</sup>)  
 「淵の底の屋敷」(岩手県江刺郡<sup>(一)</sup>)

「淵の底の座敷」(同紫波郡)

「海中の御殿」(熊本県鹿本郡)

「山の穴の奥の御殿」(岩手県江刺郡<sup>(二)</sup>)

(水中の異郷ではないが、柴の礼として美女が案内し、金を出す力のある童子を授けてくれる。)

海底ならざる竜宮がある一方では、海中にあっても竜宮と呼ばれないものも、あることがわかる。

## 二 竜宮の贈り物

右のように、訪問する異郷の名称とその所在地を分類してみるだけでも、竜宮訪問型説話と呼んでいるものの複雑さがうかがわれるが、次には、重要なモチーフの一つとしてどの説話も具備している「異郷からの贈り物」について調べてみる。異郷との交渉を語る説話で、その地に赴いたこの世の人が、何を授かって来るかということは、人々がその異郷に何を期待しているかを、端的に示すといえよう。

#### A 玉手箱及びこれに類するもの

先に挙げた、青森など四話。福井のものでは、玉手箱は、名のみで、筋には全く関係していない。

#### B

(1) 童子及びこれに類するもの

「人」(青森)「うんとく」(岩手県江刺郡)「よげない」(同紫波郡)「とほう」

(新潟)「鼻たれ小僧様」(熊本)

(2) 金を庇る犬や、これに類する動物

- 「犬」(愛知県額田郡等七話)「金の鶏」(広島)「猫」(島原半島等二話)  
 「亀」(老岐)

(3) 聴き耳(頭巾、箱、笠、など、耳にあてると鳥獣の声を聞き分ける呪宝)

長野県下伊那郡のものなど九話

(4) 如意の宝やこれに類するもの

「何でも出る箱」「打出の小槌」「竜宮の玉」「つきない黄金の餅」「満腹になる玉」「潮を満干させる玉」「そうとくだいし(米の出る像)」「シジグバンの玉(沖永良部)」「泉鉢、泉カラ(酒、料理がつきない。同前)」「くちま貝(蒔かずに行ける作物の種。同前)」「卯の日子の日は日半風<sup>ド</sup>れ」の言葉(喜界島)

(5) 霊薬の類

「万能の薬」「灸の法」「竜神の伝授」といわれる昔話」「竜王の玉(霊薬にして、しかも聴き耳)」

(6) その他

「力(藤原秀衡の繁栄に結び付く)」「虎の巻」(不明。後になって狐女房の子が、術くらべをして勝つので、そのための巻物か)。  
「桑の枝」(沖縄南風原間切のもの、穂作根岳<sup>オザン</sup>の桑の由来を語る。玉手箱型の展開をするが、昔話ではない。)

### C 異郷の娘をもらって来るもの

「ネインヤの神様の娘」(喜界3「竜宮女房」前段)「竜宮様のお姫様」(島原半島「絵姿女房」前段)

A、B、Cの分類は、説話の結末の型に従ったものである。

まず、玉手箱系統の贈り物であるが、この玉手箱は、この世と異郷との時の経過尺度の相違を象徴するものである。

竜宮には、ここでは、不老長寿の楽土であるとの観想を見ることができ

御馳走を受け、歓楽の時をすぐとするものもあって、中国の神仙思想に近いものが見られる。浦島伝説では、万葉集<sup>(3)</sup>を除けば、島子の訪れる地を蓬萊山、蓬山等の神仙境とし「トコヨノクニ」<sup>(4)</sup>の訓を附しているものすらあるが、民間の説話では、この地を竜宮としているのである。

これら玉手箱をもらう話では、時間の意外な経過を知る条がある。三年が三百年、又は、数百年であり、暫くと思ったのが二百年だったりする。秋田の「山ほどの土産」をもらって来るものでも、時の異常経過と身体の変化が述べられるが、贈り物そのものは、玉手箱のような象徴的なものではなく、非常に素朴である。この意味で、Bに含めてもいいと考えられる。

玉手箱による急速な老と死とをクライマックスとする昔話は、数の上から見てごく少数であり、大多数はBの宝物類をもらって来るものである。この場合にも、時の異常経過のモチーフを備えているものが、かなり多数ある。ただ、この場合には、玉手箱型の話よりも、異常度が著しく小さくて、主人公の宝物による活躍に支障のない程度である。福井のものは、特異な例と考えられる。

玉手箱をもらって来る説話の結末は、死とか老衰という昔話としては、淋しすぎるのに対し、B類の宝をもらうものでは、自分の慢心や、家人の慾張りがないかぎりには、大金持になり、幸福に暮すという結末である。したがって竜宮は、そうした富や幸福を授けてくれた神のいる地として登場する程度で、話の中心は、得難い宝を手にした主人公の活躍の方にあると考えられる。

しかし、話の中心的興味が、そのように移行していても、なお、時間の経過速度の相違を語らずにいられないということは、竜宮が、この世から隔絶した異郷であるとの考え方が、依然として生きているからなの

であろう。このことは、他の一連の昔話である「沼神の手紙」や「黄金の斧」についても言い得る。やはり沼や淵から帰ると三日と思ったのが、三年だったなどとしているものがあり、これらの水底には、沼の主や姫がおり、金を放る「ぎり」や、小犬をくれるといい、竜宮といちじるしい類似を示している。

うんとく、よげない、とほう、鼻たれ小僧などの醜い童子は、渋々もらって来るが、実は、彼らは金でも米でも好きなだけ出してくれる如意の童子であった。鼻たれ小僧を除けば、他は、東北日本の昔話であり、「よげない」をデユ(出居)に隠して住ませたとしている例からも感じられるように、「ザシキワラシ」の面影がある。

聴き耳は、耳にあてて、動物が、「殿の姫の病は御殿の柱の下に蛇と蛙が生埋めになっているからだ」と話しているのを聞き分け、それを取除いて姫を癒し、婿におさまる、という展開をするが、中には、主人公を童子丸として、竜宮から聴き耳、虎の巻をもらって来て、道満を術くらべで負かすとするものも、青森、長野、徳島、香川にあり、清明に関する伝説の要素を加味している。

聴き耳型の話は、全体的に見ても、狐女房の説話を前段として持つものが多いが、童子丸が主人公のものは、葛葉伝説の色が濃い。陰陽師の神秘的な神通力を、昔話では、竜宮に帰していることがわかるのである。

童子や聴き耳に限らず、竜宮の下さった宝は、いずれも、この世には二つとない貴重なものである。竜宮は、およそ超自然的超人間的と見られる力の源であり、民衆が、この世の生活では望めない、法外な幸運や富裕も、竜宮様は、実現してくれると考えていたことが、これらの呪宝、如意宝を通して知られる。「梔貸伝説」も、竜宮を物質的需要を充たしてくれる所と考えていることを、よく示す。多くは、「梔貸せ淵」「梔

貸穴」等から、膳梔を借りたとしているが、その奥や底が竜宮に通じるとして、「竜宮淵」「竜宮の塚」と呼ぶ地方もある。こうした宝物、贈り物の面から見る時には、竜宮という異郷の観想の中には、物質的、現世的な欲求を満たしてくれる神の居所、という観念が強いことが知られる。

しかし、このような人間の憧憬の的となった異郷が、海底なる「竜宮」に限られていないことは、注目すべきである。

梔貸伝説で水を離れた「竜宮」があったように、竜宮は富と幸福への夢をかなえる地の名であったが、この名を取らない多くの水中の異郷にもこの観想があり、また山中の穴の奥の御殿にも、如意童子を期待し得ることは見逃せない。最後の山中の穴については、「地藏浄土」「鼠浄土」との関連が考えられよう。

B類の宝の中で、特に注意をひくのは、香川県の佐柳島で、童子丸が、敗走する道満を溺らせたとする「潮の満干する玉」と、喜界島で、知らずに舟を出した友人(釣縄を返せと迫った)が、嵐にあって溺れ死んだとする「卯の日子の日は日半風<sup>ド</sup>れ」の言葉とである。どちらも、海の水や天候を自由にする呪宝であり、ここでも、先の山幸彦の海宮行神話を連想させるものがある。

綿津見の神豊玉彦は海水や海为天候を支配する海神であったが、神話はこの神に田の水を支配する力をも与えているのであり、海陸の司水神たらしめている。竜宮の神について見る時には、竜宮訪問型昔話で、この神の司水神的性格を表明する宝としては、右の二つほどしか挙げられない。しかも、喜界では、竜宮でなしに、ネーの島である。

だが、この型の昔話以外の口碑にまで及んでいくと、「黄金の斧」型の伝説の中に、淵の底の乙姫から、「旱天には淵を掻き、乾せば雨が得

られる」と教れたとするもの(奈良県賀名生村<sup>アナウ</sup>「乙姫淵」)や、大淵から来た「竜宮小僧」が田植を手伝い、死後、その遺体を葬った土手から清水が湧いて、附近の田を潤した、とするもの(静岡県鎮玉村<sup>6</sup>)などには、竜宮と司水能とが結合していることが示されている。

さらに「竜宮祭」「竜神祭」の名の祭礼が、漁民の海神祭としてのみならず、農村の水神祭としても行われていることや、農村の雨乞いの際の唱え言を「リュウオウモウシ<sup>7</sup>」といっていることなどに目を向けるならば、実際民俗において、竜宮と水神との一致を立證するものは少くない。

ただ、竜宮訪問型昔話で、如意宝、呪宝の面からは、それをほとんど見出し得ないように思われる。竜宮の贈り物を通じて知られる竜宮観としては、今までのところ「不老不死の仙郷」「富と幸福を支配する神の居所」が、主たるものである。そして竜宮祭や雨乞いなど、信仰的基盤の上に立った司水神としての竜宮という考え方は、ここでは抽出し難いのであるが、昔話が多くの人に口承されていく「文芸」である以上、興味本位になり、文芸化も進んで、次第に表面から信仰性を失っていくであろうことは、十分考え得るところである。

司水能を獲得することによってもたらされた幸福が、やがて、直接に物品や金銭によるそれへと、発展していったものではあるまいか。それでは、竜宮様の所で神様の娘をもらって帰った、とする昔話には、竜宮観がどのように表われているのか。島原、喜界ともに、竜宮訪問の物語は、異類女房譚の前段となっている。異類女房譚は、伝説、昔話を通して、わが国には非常に多数あり、女の方から嫁入って来る型をとるが、この二つでは、男が、出かけていき、「婿入り型」と言える。

一方、異類女房譚中、「竜宮女房」として分類されている昔話をみると、女がどこからともなく訪ねて来るといい、花や薪を「乙姫様へ」とい

って投げたのに対する返札としての嫁入りであるとしている。そして、女の素性を、竜宮界のものと明かしたり、乃至は、竜宮から来たことを暗示する程度で終わっているのが普通である。その女が、竜宮の乙姫自身であるようにも、神や乙姫から遣わされて来た者のようにもとれる曖昧さはぬぐえない。しかし、この二篇にあっては、竜宮女房は、神の娘その人である。

竜宮女房が、一方では、「炭焼長者」や「鶴女房」につながり、他方、異類の女が、子供を残してもとの住み家に戻っていく、とする始祖伝説とも関連を有することを知られる時、竜宮の神の娘、乙姫の位置は、非常に重いものに考えられて来る。

柳田国男氏は、鼻たれ小僧を手に抱いて、淵の面に現われる上臈には、この童子の母親としての面影がちらつく、といわれているが、この推測を支持する根拠は、決して弱くないと考えられる。竜宮童子が、何故小さな童子なのか、を考えると、その背後に母なる女性が置かれていいのではないだろうか。

彦火々出見命の妻となって、天孫の母となった海神の娘豊玉姫とその妹玉依姫の神話は、これと決して無縁ではあり得ない。さらに、「乙姫」の地位を重からしめるものは、柳田氏の指摘にもあるように、竜神に代って竜宮の主の座を占める乙姫が、我國の説話の中では普通であるということである。本稿で扱った範囲の、竜宮訪問型昔話にあっては、「竜神」「竜宮様」に代って、単独で、乃至はこれらの神と相並んで、乙姫様お姫様が現われているものは、竜神一人が登場する場合に、ほぼ匹敵する数を占める。

さらに、「竜金の斧」の説話でも、「姉様」や「淵の主という娘」が、単独で姿を現わしているものが少くない。先に挙げた「乙姫淵」も主人

の名を冠した名称である。このように考えて来ると、竜宮の神から、妻としていただいて来た姫の、民間の異郷観研究上に果たす役割には、はかり知れぬほど大きなものがある。

竜宮という名称の原典である法華経には、竜王の女の成仏が述べられているが、この法華経の竜女は、日本の乙姫とは、あまりにもかけ離れた存在であるといえよう。

「乙姫」は今昔物語<sup>(10)</sup>にその萌芽が暗示されており、竜宮の住人たるに止まらず「猿掣入」の昔話にも登場し、<sup>(11)</sup>本来は、「弟姫」<sup>おとひめ</sup>たることを示しているが、竜宮訪問型昔話にあつては、「乙姫」は熟し切った名称となり、この名の女性は、独自の機能を果たすに至っていると考えられる。すなわち竜神の娘たるに止まらず、みずから竜宮の主宰神でもあり、またそれ故に、人の世に妻となる女をつかわしもし、自分自身が、やって来ることもなるのである。「竜宮女房」のもっているあの曖昧さも、民衆自身の中にある、乙姫のこうした重複する観念に、原因があると考えられる。

しかし重複してはいても、水界と女性との緊密な関係の点では単一であり、竜宮童子の母としての乙姫を、この竜宮女房譚の乙姫のイメージに加えてみるならば、水界の女性と宝物の授受以上の交渉を持つとうとした民衆の姿が、浮かびあがって来るのである。

水界とは、女性を介して交渉しようとしたこと、これは、結局、わが国持所有の水神信仰を物語るものではないだろうか。

## 二 竜宮訪問の契機

次に、竜宮を訪問する契機となる事柄について調べてみたい。これも種類が多いが、大きく次のように分類する。

### A 亀、乃至はこれに類する動物の報恩

B 植物(柴、薪、譲り葉、門松、花など)投入に対する返札  
喜界には、ぬれた炬火<sup>たいまつ</sup>を海に投込むとあり、沖永良部では、山で翁(実はニラの神様)に教えられて薪を海に投げる。

C 餅搗杵を投込む、餅柴を売りに行って海辺で休んでいる、とするもの

D 兄又は友人の漁具を失ってとするもの(沖永良部、喜界)

E 釣った魚と夫婦になって里帰りのため、または生れた子に案内されて、とするもの(沖永良部<sup>2</sup>、石垣島)

F 黒髪を神女に返してという羽衣型のもの(沖縄南風原間切のもの)

動物報恩のモチーフは、昔話によく見られるものであり、ここでも、五十に近い昔話の三分の一弱を占める、神女に黒髪を云々というのはむしろ伝説で、しかも民衆的色彩が希薄である。漁具をとり返しに海中へ行くとするものはやはり神話を想わせるし、釣った魚と夫婦になって出ていくものには、先に考察した乙姫の姿が、ほの見える。

ここで特に問題にしたいのは、動物報恩を数的に上まわる植物の水への投入、というモチーフで、二十篇ほどある。柴、薪、花、木株等を海や川、淵に投げると竜神の使いや美女が、礼に来て、竜宮へ案内するというものである。

植物の種類は一つでないが、そのほとんどが「大歳の夜」「年の暮」と

いう時節の限定を持っており、それ故に、「門松」「譲り葉」「せちくんぜ」(正月用の薪——高知県高岡郡)、「もろもく」(注連飾にする裏白——島原)等の、正月用の特殊な植物が、これらと同じようにして投入されているのも肯けるのである。

竜宮訪問のモチーフはないが、やはり竜宮との交渉を物語る多くの話の中にも、大歳の日、竜宮へ、乙姫へといつて門松、薪を投げるものがある。したがって、餅柴を売りにいって、餅搗杵を投げて、とするものも、正月に關係する点で、同類と認めていいのではないだろうか。

正月の、薪柴との關係を、実際の民俗に、求めてみることは困難ではなく、「年木」と称するたき木を師走十三日に山から伐つて来て、軒下や庭先に積みあげる風習が、熊本、鹿児島などにあり、親方のために、出入りの者がこれを行うという<sup>(12)</sup>。下飯島や香川の志々島の話で、竜宮に行ってみると、自分の投げ込んだ割木や木の株が積んであった、としているのは、この習俗の反映であろう。

使用人が主人のために、というのみならず、里方の親や伯父母の許に、この薪を贈る風も南九州にある。<sup>(13)</sup>

竜宮様に、といって、薪柴を投ずると、もらった方で非常に喜んで、招待するというモチーフは、こうした実際の習俗を、受け取る側を竜宮にして、説話化したものであろう。

「年木」には、薪として用意するだけでなく、小型のものを、小屋や道具の一つ一つに供えて、譲り葉、裏白で飾る風習もあったことが記録されており、<sup>(14)</sup>年木の持つ、正月神への供物的性格を示している。

門松は、正月の神の招ぎ代と考えられ「お松様」といって山から迎えて来るし、譲り葉、橙、「もろもく」も、正月神を祀る歳棚には欠かせない。橙については、島原のものが、竜宮訪問をもって、この実と正月と

の結び付きを説明しようとしているのが興味深い。

親許や主人の家に、年木を贈るという民俗は、竜宮に、お正月迎えるための薪をさし上げて喜ばれるとする、童話的着想の動因にはなっても、年木のもっている正月の神まつりそのものとの関連性を問題にする時には、竜宮様が、神であることに注目すべきであろう。門松、譲り葉にいたっては、それはいうまでもない。

この世と水中の世界が、同じような正月を迎えるものだと考える、童話的に素朴な異郷意識には、信仰の度合は小さいようである。しかし、年木、門松等の祭具としての性格や「乙姫様、竜宮様の名を呼んで」投げ入れ、「竜神を拜んで帰った」とするのは、竜宮に対する信仰的態度が現われている。そして、この竜宮への信仰は、門松や年木が正月の神を対象とする以上、竜宮様と正月神との關係を問題にせずには、究明できないものであろう。

秋田や壹岐のものでは、正月に植物を水に投げるのを毎年の慣例としていたといい、この主人公を「信心深い」としている。「大歳・正月」とは言わず「毎日」乙姫へ花を流して「とほう」をもらった話は、新潟にある。これは、正月神に直接つながらないが、信心深さが報いられる点では、竜宮への信仰が裏にあることを示している。

岩手県稗貫郡の地藏浄土型の昔話の発端は、年越に、井戸の水神に餅をあげるとなくなったといい、水神が「うまがった。度々あげてけもせ」と礼をする運びになる。(この水神は、他の地方では地藏である。)年越に、井戸に鏡餅や門松をあげる風習は、物置、厩舎、閑所と並んで行われる場合が多く、正月神を迎える祭場としての準備の意味あいがある。と考えると考えられる。

しかし、この井戸の水神を、特に正月に際して崇めこれを祀る風もあ

る。若水迎えに際して、井戸の傍で手を打ち「若水を迎えに来ました」といい、「こがねの水を汲みます」とも唱えるのは、南部地方であり、津軽でも、まず米をあげてから汲む。餅を井戸神に供して水に入れ、年の吉凶を占う風も、東北や九州にあり、三河ではこのとき、井戸から小石を拾って、一年中保存しておく。土佐幡多郡では、若水迎えには、松明をともして井戸の中を照す。昔、こうして福の神を見つけた者があると伝える<sup>(15)</sup>。このように、正月に、井戸の水神を祀り、これを前にして年占をする風習には、正月神と水神との密接な関係を暗示するものがある。そして、この水神と正月神とが結びついている点にこそ、正月神と竜宮との関係を明らかにする鍵があると考えられる。

水神信仰という背景を持った竜宮を、今まで昔話の中から、司水能の呪宝や乙姫などを通してとらえて来たが、正月神と同様にして、竜宮様が祭られるのも水神たるところに由来するのではないだろうか。

枕貸伝説をみて、長野の「起因の井戸」では、井戸の中段に格子がはまっており、霊俗二界の境を画しているといわれるし、井戸の底が竜宮に通ずるものもあり、井戸と水の霊界とのつながりを示している<sup>(16)</sup>。植物投入によって竜宮に迎えられるとするモチーフを究明してゆくと、正月の神と同じ扱いを受ける神としての竜宮が、問題になるのであるが、この点を、昔話を通してさらに追究するために、今度は「大歳の客」「笠地藏」など、年の暮から正月にかけての時季を舞台として物語られる一連の昔話を分析し、竜宮訪問型昔話とつながりを持つ面を調べてゆこう。

「大歳の客」は全国的分布を持ち、筋は、大旨次のようである。

大歳の夜、貧しい爺婆の許に、宿を乞うて、旅人(乞食、坊主、老人)が来るので、泊めてやると、翌朝は姿が消えて、代りに、金銀が残っている。また

は、一旦死んで、死体を隠しておくと、朝には金に変じている。

これと習合したと見られる竜宮訪問型のものは、八戸市附近で採録されている。

「門松を海に投げると、竜宮様が、松で年取りするのは初めて、と喜んで、『人』というものをくれた。つれ帰って、夫婦の間に寝せておくと、朝には姿が見えずに、板の間に光った鍵があって、家の前に五つの蔵が立って、いる」というものである。

これは、「竜宮童子」を物語っているものであるが、後半は「大歳の客」と同じである。鍵となっている所は、新味があるが、この「人」も大歳の客と同じく福の神である。

この大歳の夜の福の神という観想は、「笠地藏」との比較に依っても明らかである。「笠地藏」は「大歳の客」と結合する一方「竜宮訪問」型のものにも連なる。

貧しい爺が(多くは)年の暮に雨雪にぬれている地藏に笠を被せ、餅もつけずに大歳を迎える。その夜中、または翌朝早く、車の音や掛声が聞えて、餅や米銭を戸口の前に積んでいった。地藏の後姿が見えたともいう。

これが「笠地藏」であるが、佐渡では「六地藏に菅笠を被せると、大歳の夜に老人が泊りに来る」として「大歳の客」と結合する。「女中が、死人をひいて来た七人を、主人に内証で泊めてやると、翌朝には、死人が小判になった」とするのが、阿波祖谷山<sup>イハヤマ</sup>にあり、この七人は、「七福神」だったという。

やはり、同地の別の話では、「七人の正月神様が、笠を借りに来た」となっており、大歳の客や、地藏に名を変え、姿を変えた福の神が、実は正月神であることを示している。

竜宮にも「笠地藏」と結合して、大歳の福の神を語るものがある。

大晦日の夜、門松を乙姫様へ、といって、川に投げて帰ると、夜中に、声が



して家の外がさわがしくなった。朝、見ると米や魚の山があった。きっと、乙姫様が、お礼に米られたのだらうと言って、いい元日を祝った。(新潟)

門松に対する乙姫の礼は、大晦日に被せた笠に対する地蔵の、一夜の宿に対する旅人のそれと同じである。

土佐幡多郡で、若水を汲みに来て、井戸の中に福の神を見つけたという言い伝えは先に記したが、長野県小県郡には「大歳に泊った座頭が、井戸におちたので、綱で引上げると『上るは、上るは、福の神が上るは』と呼んだ」という話があり、座頭は後に小判に変ずる。水界の乙姫が、福の神の働きをしているように、ここでは、大歳の客が井戸と関係して、やはり、水界と福の神との結び付きを暗示している。

竜宮の乙姫と、旅人とは、一方が、水界という明らかな出自を持ち、他方は、どこからともなく来訪するに過ぎないのであり、福の神としての来臨形態には相違がある。にも拘らず、大歳の夜半に、福をもたらす点で、両者は同じ機能を示すのである。

大歳の客が、福の神として井戸から上って来るとする先の小県郡の説話も、福をもたらすという機能において同一視、または、混同された神霊に対する信仰を反映するものであろう。

水神は任々にして田の神、作神と同じものともみなされる機能神であり、正月に迎える歳の神は、季節的来訪神である。しかし豊饒を司どる点で、両者は接近しており、同一視されている場合も、よく見られる。

昔話の竜宮様、乙姫様が、大歳の日に、福、または福の神をこの世にもたらすとするモチーフも、正月神に対する民衆の信仰が、水神への信仰と、からみ合っていることをおのずから披瀝しているものと考えられる。

植物類を、大歳の日に水へ投入して竜宮へ迎えられるとするモチーフの意味を明らかにしようとして到達した所は、やはり、正月の神への信

仰と統合し、それによって民間信仰に占める比重を大きくした水神信仰に他ならないのである。

これまでは、竜宮訪問型昔話を、おもな要素にそって分析し、竜宮に対する意識、観想等を明らかにしようとして来たが、昔話にあらわれる、異郷は、水界だけではない。山中、地中の異郷を語るものも少なくない。いわゆる「かくれ里」である。

そこで、全国的分布を持つ「鼠浄土」「地藏浄土」の昔話に見られる異郷と「竜宮」とを比較することによって竜宮の姿をもっと明確にしていきたい。

### 三 「鼠の浄土」「地藏浄土」の異郷と竜宮

鼠の浄土は、握飯をころがすとおち込む穴から続いており、鼠がうたを歌いながら餅を搗いているといい、童話性に富み、笑いの要素も大きい。しかし、爺が、握飯の礼に餅を御馳走され、宝(大判小判)をもらって帰るというモチーフは、竜宮に赴いた者の場合と同様である。

同じく、地藏が、穴の中で、転げ込んで来た団子や握飯を食べ、その礼に、鬼をおどかして、その金や宝を爺に与えてくれるとする「地藏浄土」も、異郷に宝や富を期待している点では、変りない。

しかし、これらの異郷は、水界ではなく、鼠の浄土にあっては、山中の穴から、他に、自分の鼠の穴や家の中の節穴などの、思いがけない

身近な所からも達しているといい、地蔵浄土も山の穴から、とするものが多い。

地蔵は、道祖神信仰との結合により、ことに民衆に親しまれるものとなっているが、「笠地蔵」も、広い信仰を集めるこの地蔵が、福の神としても考えられたことを示している、多く村の境などにあって、外から入って来るものを防ぎ止める、塞の神の働きが、この昔話では、地表と、鬼の住む地中の異郷との境に立っている地蔵、という設定になっている。

「鬼」の觀念の成立過程も複雑であるが、地中の異郷は、宝を手に入れることの出来る地であると同時に、サイノカミに防ぎ止めてもらう必要のある、おそろしい靈物の棲家でもある。

鼠の浄土は、地中にある点で、この地蔵浄土と同一視、または混同されやすいと考えられるが、岩手の話では、穴の中では鼠が博奕をやっており、爺の鶏なきにおどろいて逃げ出すとし、地蔵の穴における鬼が、鼠に代っているなどはその一例である。

それでは、これら地中の異郷と、竜宮との関係はどうであろうか。

竜宮訪問型のものや「沼神の手紙」などでは、ごく普通に、目をつぶらせて案内するというモチーフがあるが、鼠の浄土でも、よく用いられ、途中で目をあけたので、真暗な穴の中に放り出されてうえ死する、という変型さえ生じている。また、鉈を落すのが、水中ではなく鼠穴とするものや聴き耳を鼠の家からもらって来る、とするものもあり、水界と地中の異郷とは相通じている。<sup>18)</sup>

岩手の黒沢尻町には「節穴の奥に豆を追っていくと、大きな座敷に小人がいて、鶏の鳴きまねをさせ、うまいとほめて、『かぶれわらし』をくれる。爺は、そのわらしのおかげで、長者になる」という一篇があり、鼠または地蔵の浄土を舞台にして、筋は竜宮童子型に展開している。

すでに挙げたが、同江刺郡のもので、山中の穴に、悪いものが住むとって、柴を入れたとするものは、竜宮と、これら地中の異郷との信仰的関連を非常に顕著に示している。また、爺を迎えに来たのは、鼠でも小人でもなく、美しい女であったが、このモチーフは、地蔵や鼠の浄土の型の説話に用いられている場合もある(青森など)。

爺が、もらって来たみにくい「わらし」は「かぶれわらし」と同じ福の神であり、地中の「竜宮童子」である。しかも、このわらしが、竈の前にかけておけば、家が富むと信じられる「ひようとく」の起源となる、としており、信仰性も濃い。<sup>19)</sup>

水中と地中の異郷は、所在の觀念や、後者の説話における著しい滑稽味など、大きな相違がある。竜宮訪問型のもので、訪問の契機となった植物の投入に際して、「竜宮様の名をよんで投げ」「竜神を拜んで帰った」などの個所を、リズムカルに、おかしみたつぷりな調子で、握飯のころげていくさまを描き出すくらに比べてみることはできない。

しかし、これらの昔話相互間でいくつかのモチーフを共有し、または、部分的に結合するなどの事実、この世で望みえない幸福がふとした拍子にもたらされるとする、民衆の願望と夢とを、この相異なる異郷が、ともに満たしていることを示すものであろう。

## 結 び

以上、竜宮訪問型の昔話を中心にして「竜宮」に表現されている民間の異郷観と、それをささえている信仰を検討してきたわけであるが、この型以外にも竜宮の出てくる昔話は数多くあり、これまでの論で「竜宮」

のすべてを網羅したわけではないが、扱った範囲で竜宮意識や、竜宮、観を総括してみる。

竜宮は、浦島太郎が、玉手箱をもらって帰った神仙境であるに止まらず、むしろ、「異郷」の代用語といってもいい。

不老不死の楽土として、従って時の経過速度の著しい相違を伴うとして、語られているのは、昔話の数からは、まことに少く、圧倒的に多数を占めるのは、この世では得がたい呪宝や如意宝を数々もらって、至上の幸福を得ると物語るものである。それらの説話においては、竜宮は、童話性に富んだ、想像上の異郷としての面影が強い。

しかし、また、竜宮祭、竜神祭の名でよばれる祭礼が、全国各地で行われているのを反映して、信仰的基盤を指摘し得る竜宮も少くない。

潮の満干する玉などの司水の呪宝を贈られるとするものは、海神としての竜宮様を見ることができ、薪・柴・門松などの植物を大歳の夜に水に投ずるをもって、竜宮訪問の契機とする非常に多くの昔話は、水神信仰の裏付けが特に濃いことが明らかにになった。竜宮様、乙姫様が、正月に訪れる福の神と同じ働きをする、とする話は、これら竜宮の主が、水神であることに由来すると考えられるからである。

そして、この水神としての竜宮様は、水辺に姿を現わして、人間とさまざまな交渉する女性（「乙姫」はその代表である）や、その子と目される小さい童子等によって、さらに明瞭となるのである。

竜宮の名を持つ異郷は、かならず富や悦楽の地としての観想を備えているが、この外来の名称を取らない多くの異郷が水中に観ぜられ、こうした水神信仰の色彩を強く示していることは、我国本来の水神信仰というものの根の深さを、物語るものであろう。

こうした水神信仰に発した竜宮観こそ、富裕な生活や幸福な結婚を实

現してくれる呪宝如意宝の類の出所としての竜宮を、昔話において特に発達させるに至った母胎であつたろうと考えられる。

しかし、竜宮の、この人間にとってきわめて有難い贈り物も、無条件で人々に許されているものでない。竜宮に招かれるには信心や慈悲や親切が必要であり、如意宝や呪宝も、乱用したり粗末に扱っては、たちまち富も幸福も消え、身の破滅を招く。ここに、昔話の教育的価値が認められるし、他方、民衆の幸福や富に対する峻厳な態度がおのずから流露している。

水界の竜宮に並行して、昔話によく出て来る山中や、地中の隠れ里にも、同じことが言える。人々は、日常生活の舞台となる地表の狭い空間の外に、こうしたさまざまな異郷を観じ、そことの、稀ではあるが皆無ではないところの交渉を信じていたのである。

かくの如き竜宮観も、やがては空想の産物としてのみ考えられるようになり、信仰の範囲から完全に退いたばかりでなく、昔話の上の趣向としての文芸的生命をも失うことになった。このことは「俵葉師」の昔話で「竜宮」がどのように扱われているかを見れば明らかである。嘘つきで、悪賢い小僧が俵づめにされて捨てられるところを、悪知恵によって助かり、ふたたび主人の前に現われて「俵に入つて、竜宮へ行き、遊んで来た」といい、これを真に受けた主人を俵詰めにして、水に捨てる。

竜宮は、ここでは、全くの架空の地であり、そこへ行くことは、溺れ死ぬことに他ならない。小僧の嘘の、嘘たるところが「竜宮」にあり、それを信ずる素朴な主人を、小僧は亡き者にして家財を奪ってしまう。竜宮への夢は、全く打ち破られたのである。

竜宮を否定し去ったこの話は、悪の勝利をもって終る。竜宮への憧れと信仰を盛り込んだ本格昔話の鉄則は、「善は栄え、悪は必ず滅ぶ」とい

うことであつたが、うそつき小僧の繁栄を以て結ばれるこの話は、派生物たるにすぎず、その中では、竜宮は、もはや本格昔話におけるがごとき、扱いを受けることは、できなくなった。

南西諸島の昔話も、モチーフや筋の類似性は、指摘し得るにしても、ニラの島やネインヤ、ネリヤを、竜宮と同一視することには、躊躇を感じざるを得ない。これらの水中の異郷は、ある場合には、海上の島としても考えられているし、信仰的性格は、本土の竜宮よりも遙かに、鮮明である。説話自体、神話にじかに、つながっていくような面も多く、原始的で素朴である点も、本土のものとは異っている。

しかし、全く別物と做すこともできないのはもちろんで、今後の研究に待つべきものと考ええる。

## 註

- 1 浦島伝説は、「雄略紀」、「丹後風土記逸文」(釈日本紀卷十二)、「万葉集卷九」、「扶桑略記統浦島子伝略抄」、「群書類従文筆部浦島子伝、統浦島子伝記」等に見える。
- 2 この他にも、「全国昔話記録宮崎島昔話集」(昭和十六年)には、吉野秀政翁説話集よりとして、如意童子「禿童」の説話を記している。
- 3 万葉集では、「海若の<sup>わたつみ</sup>神の女に<sup>をとめ</sup> たまさかにいこぎ向ひ(中略) 常世<sup>とこよ</sup>に至り 海若の<sup>わたつみ</sup>神の宮の(下略)」となっている。
- 4 雄略紀二十二年の条に「水江浦嶋子(中略) 到<sup>ト</sup>蓬萊山<sup>コノノクニ</sup>一歴観仙衆一。」とある。
- 5 中部地方に多く分布する。多くの客があつて、たくさんのお膳が必要になつた時、その旨頼んでおけば、数だけそろえて、塚、穴、淵等に出しておいてくれたと伝え、一つこわしたのを、そのままにして返したため、或は、一つだけ返さなつたので、それ以後、借りられなくなつたとする。
- 6 「乙姫淵」の伝説ともに、柳田国男「日本伝説名彙」(昭和二十五年)による。
- 7 「リュウジンマツリ」「リュウグウマツリ」ともに、「綜合日本民俗語彙」

## 才四巻。

- 8 柳田国男「桃太郎の誕生」所収の『海神少童』(昭和八年)
- 9 柳田国男『海神宮考』(『民族学研究』沖繩特集号昭和二十五年十一月)
- 10 「今昔物語」卷才十六代観音人行竜宮得富語才十五に「子数有<sup>アタタ</sup>ル中ニ、弟子<sup>オトゴ</sup>ナル女童<sup>メノラフ</sup>」とある。
- 11 田に水をかけてくれた、または、畑を耕してくれた猿に、三人いる娘の中の末娘が、嫁に行くが、娘が知恵を働かせて、猿を川に溺れさせる。猿は、辞世の歌をうたいながら流れていく。その歌の中に、「乙姫」が出て来る、たとえば、  
さるふじの死ぬる命は惜しまねど後で乙姫が泣くぞかなしき  
(埼玉県川越市)
- 猿川に流るる命惜しからず乙姫ごぞの泣くが可愛いや  
(新潟県佐渡島)
- 12 13 14 「歳時習俗語彙」(昭和十四年民間伝承の会)『年木新木』の項  
中古の朝儀「ミカマギ」(御薪)も、同じものと考えられる。
- 15 いずれも「歳時習俗語彙」『年男の役目』の項
- 16 北見俊夫「日本人の異郷観念の一断面——枕貸伝説をめぐる——」(『日本民俗学』才一卷才四号昭和二十九年)
- 17 群馬県群馬郡榛名町の長念寺の井戸に伝わる。
- 18 二で扱ったが「井戸の水神に餅をあげると、水神が食べて礼をする」とする一篇も、地蔵が水神に代えられているものである。
- 19 郷田洋文『竈神考』(『日本民俗学』才二卷第四号)では、竈神(オカマサマ)は、農作神の性格を持つことから、田の神、水神と関係づけられるとして、この説話を引用している。